



Title	『伊勢物語』摘注
Author(s)	後藤, 康文; Goto, Yasufumi
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 172, 1 (右) -37 (右)
Issue Date	2024-03-22
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/bfhhs.172.r1">https://doi.org/10.14943/bfhhs.172.r1</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/91381">https://hdl.handle.net/2115/91381</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_172_Goto.pdf



## 『伊勢物語』 摘注

後 藤 康 文

本稿は、『伊勢物語』注釈の惨憺たる現状を座視するに忍びず、いまだ正しく解説されていない章段を順に取り上げて私解を開示するものである。なお、それらの骨子は、拙著A『伊勢物語誤写誤読考』（笠間書院、平一二）、または、拙著B『日本古典文学読解考―『万葉』から『しのびね』まで―』（新典社、平二四）においてすでに述べたところである。

## 第十一 段

【本文】（底本Ⅱ学習院大学蔵本）

昔、男、あづまへ行きけるに、友だちのもとに、道よりいひおこせける、

忘るなよほどは雲居になりぬとも空行く月のめぐりあふまで

（二二才・五行〜八行）

【現代語訳】

昔、男が、東国へ行った折に、（京のある）友人のもとに、道中からいつてよこした歌、

（どうか私のことを）忘れないで（いて）ください。（あなたと私との）距離はたとえ雲居ほど遠くになつてしまつたとしても、空を行きめぐる月が（沈んでもまた上つて、再び）めぐり会うように、われわれが再会を果たす時（が来る）まで。

【注】

○友だちのもとに―「のもとに」は底本以下諸本「ともに」。しかし、ここでの「友だちどもに」という複数形表記はいかにも不審であるため、誤写とみて本文を改めた。参考「ねむころにあひ語らひける友だちのもとに」（『伊勢物語』第十六段）「女のもとに、道よりいひやる」（同第二十段）「友だちの、人を失へるがもとにやれりける」（同百九段）等。ちなみに、屋代弘賢の『参考伊勢物語』によれば、かつて存在した為家本の当該本文が「道より友だちのもとへいひをこせける」であつたことが知られる。○「忘るなよ」歌―周知のごとくもとは橘忠幹の歌であるが、『拾遺集』の詞書は「橘忠幹が人のむすめにしのびてもいひ侍りけるころ、遠き所にまかり侍るとて、この女のもとにいひつかはしける」（雑上・四七〇）。また、宮内庁書陵部御所本『業平集』巻末歌のそれも「身のうれへ侍りて、あづまの方へまかりて、友だちのもとへいひおくり侍る」。

【余説】

詳細は、拙著A前編第六章をご参照願いたい。が、諸賢は依然現存本文を是とし、京を遠く離れた男が複数、の友人たち、に一首の歌を詠んでよこしたという設定を疑問視しておられない。となれば、ただ単に、疑う方が愚かなだけかもしれないので、なぜ複数、でよいのかをどなたかご説明願えないものだろうか。無論、童蒙にもわかるように平易に明快に、そして論理的に、である。

第十四段

【本文】

昔、男、陸奥みちくににすずろに行きいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけむ、せちに思へる心なむありける。さて、かの女、

なかなかに恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれと思ひけむ、行きて寝にけり。夜深く出でにければ、女、

夜も明けばきつにはめなむくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

といへるに、男、「京へなむまかる」とて、

栗原の姉齒の松の人ならば都のつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひをりける。

(一三ウ・二行〜一四オ・九行)

【現代語訳】

昔、男が、陸奥にあてどなく行き着いてしまった。(すると、)そこに住んでいる女が、京の人はめったになく(すばらしい)とでも感じたのだろうか、一途に思いを寄せる気持ちがあったのだった。そこで、その女は、(堪えかねてこう詠んでやったのだった。)

なまじっか(叶わぬ)恋(のため)に死んだりせずに、(いつそのこと、雌雄一対で繭に籠るといふ)蚕になるべきであった。(たとえ)玉の緒ほど(のほんの短い間)であっても。

(女自身はもとより、詠んだ)歌までもが田舎じみていたのだった。(男は)そうはいうもののかわいそうだとでも思ったのだろうか、(その夜、女の家へ)行って共寝をしたのであった。(ところが、男が)深夜に出て行ってしまったものだから、女は(たまらず)、

夜も明けたならば(すぐに)、水桶にぶち込んでしまおう。腐れ鶏めがまだ時刻でもないのに鳴いて、(私の)愛しいあの人を(早々と)帰してしまつたことよ。

といったのだが、男は(意に介さず)、「京へお暇します」といって、

(ここ)栗原の姉齒の松が人であるならば、—あなたが(せめて)人並みの女性であるならば、都へのお土産に「さあ(一緒に)」といいましようものを。

といったところ、(女は、一首の真意を理解できないままに、歌を返してもらつたこと自体がうれしくて、その後)ずっと喜びつづけて、「やはりあの方は、私を)愛していたらしい」と話していたそうだ。

## 【注】

○きつにはめなむ―底本以下諸本「きつにはめなて」に作るが、「て(天)」は「ん(无)」<sup>一</sup>「む」の明白な誤写。よつて、本文を改訂した。この一首は、「思ひあらば律の宿に寝もしなむひしきものには袖をしつつも」(『伊勢物語』第三段)「五月来ば鳴きもふりなむ時鳥まだしきほどの声を聞かばや」(『古今集』夏・伊勢)等と同型の歌なのである。なお、「きつ」は不詳。通説どおり「水桶」の意とみておく。

## 【余説】

「夜も明けば」歌の第二句「きつにはめなて」の「なて」を「なで」とみて、その下に「おくものか」等の意を補つて解く『省略説』や、「なて」<sup>二</sup>「なで」を「なむ」の東国方言とみなす『方言説』が、堂々とまかり通っている現状は悲惨の一言に尽きる。詳しくは拙著A前編第四章をご参照いただきたいが、前者は語法的に成り立ちえない謬見であり、後者もまるで根拠のない妄説にすぎないからである。

いわゆる新注の時代、国学者たちは「なて」が「なむ」の誤写であることを見抜き、本文を改める立場もあった。しかるに、近・現代の諸注は、低部本文批判絶対主義に毒されて、そこから大きく後退してしまった。そればかりか、謬説をまことしやかに正当化する大失態を演じてしまったのである。

## 第十五段

### 【本文】

昔、陸奥みちのくににて、なでうことなき人の妻めにかよひけるに、あやしう、さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、しのぶ山しのびてかよふ道もがな人の心の奥も見るべく

女、かぎりなくめでたしと思へど、さるさがなきえびす心を見ては、いかがはせむは。(一四ウ・一行〱九行)

### 【現代語訳】

昔、(男が、)陸奥で、平凡な人の妻(のもと)に通つ(て行つ)た時に、不可解なことに、そのような境遇にあることがふさわしい女でもないように見えたので、(事情を知りたくなつて、次のような歌を詠んだ)、

(ここ)信夫山(のしのぶ)にあやかつて、あなたの心の奥底にこっそりと分け入つて行く方法があつたらなあ。あなたが秘密にしている過去をも見顕すことができるように。

女は、(この男のことを)、この上なくすばらしいと思つて(魅了されて)いたけれど、そのような質の悪い野暮な、田夫野人同然の性根が露見してしまつた今となつては、(ただ失望と幻滅あるのみ。もはや)どうしようもないではないか。

【注】

○なでうことなき人の妻―「なでうことなき」は「人」のみに係る。平凡な身分の夫。「人の親」「人の子」「人の妻」等は、単独ならばこの単位で機能することのだが、本例のごとく上に何らかの修飾を伴う場合は、「人」のみがそれを引き受ける対象となる。○あやしう、さやうにてあるべき女ともあらず見えければ―男は、女が現地の人間でないことを察知し、なぜこんな辺境で田舎者の妻に納まっているのか、不思議に思ったのである。○人の心の奥―この人妻が心の奥底に隠している秘密。都で生まれ育った良家の子女が、陸奥にまでさすらい来って住み着くようになった経緯。○かぎりなくめでたし―女は、男のことをこの上なくすばらしいと思っていたのである。「めでたし」の対象を男の詠んだ歌と解する立場もあるが誤り。歌を賞賛する時には、動詞「めづ」が用いられる。○さるさがなきえびす心―歌に露見した質が悪く野暮な男の心根を指す。「信夫山」歌には、女のデリケートな心の中に土足で踏み込むような、無神経で無遠慮な男のエゴイズムが発露している。みやびな貴公子でありながら、その根性は何と「えびす」さながらだという皮肉。○見ては―この「ては」は、仮定ではなく確定の語法。「し（てしまつ）た今（となつて）は」「し（てしまつ）た以上は」の意。参考「まして近く見ては、いま千重まさりて、あはれにかなしく思ほえて」（『うつほ物語』俊蔭卷）「かくよき人を見ては、さて過ぐすことのあらむ」（同内侍のかみ卷）など。

【余説】

「さるさがなきえびす心」を「女」の心と解するのが最近に至るまで不動の定説であるが、これが根本的な誤りであることは論を俟たない。「女」の「さがなきえびす心」が章段中のどこに描出されているのか、説明できるならば是非

説明していただきたいと思う。「さる」は男の歌の内容を受けてることばであつて、「信夫山」の一首は、平たくいえば「あんたの秘密が知りたい」という傲岸かつ下品な歌であることを、この際よくよく弁えるべきであらう。何度でもいうが、われわれは何よりも、あらぬ思い込みや無用な先入観に邪魔されることのない、虚心な本文の読解に努めなければならぬのである。

第十四段の「女」が「みやび」とは対蹠的な、どこまでも「ひなび」た東国の女性であり、その徹底した戯画化は痛快ですらあつたのだけれども、本段はその逆。同じ東国に住む「みやび」な人妻が、自らの来歴ゆえに憧憬と郷愁を抱いた「男」の内面に、「えびす」同然の無神経で野暮な性根を見て取り、大いなる失望を味わつたというのである。詳しくは拙著A後編第二章をご参照願いたい。

## 第二十六段

### 【本文】

昔、男、「五条わたりなりける女を、え得ずなりにけること」とわびたりける人の返りことに、

おもほえず袖にみなとのさわぐかなもろこし船の寄りしばかりに

(二五ウ・七行―二六オ・一行)

### 【現代語訳】

昔、男が、「五条近辺に住んでいる女性を、(とうとう) 手に入れることができずじまいになつてしまったこと」と

泣き言をいつてきた（友）人への返信に、

突如として袖の港に波が立ち騒ぐことです。（大きな）唐船が（不意に）寄港したばっかりに。――思いがけず私の袖が涙でぐっしりと濡れることです。あなたから（私の記憶をはしなくも呼び醒ます）衝撃的なお手紙をいただいたばっかりに。（実は、私にも過去にまったく同じ体験があつて、とても他人事とは思えません。あなたのご無念が身に染みてわかります。）

### 【注】

○わびたりける人の返りこと―泣き言をいつてきた人への返信。参考「命を知らぬ」とある人の返りことに」（伝西行筆本『小大君集』）「宿の梅少し」と乞ひたる人の返りことに」（針切『重之子僧集』）「涙の色」など書きたる人の返りことに」（実践女子大学本『紫式部集』）「いくかさね」といひおこせたる人の返りことに」（松井本『和泉式部集』）等々。また、ここでの「わぶ」は、自己の苦衷をことばで他者に訴えるの意。参考「国の司」、「民疲れ」、「国滅びぬべし」となむわぶる」（『大和物語』第百七十二段）「田舎なる人のもとより」、「日照りして」、「国のみな焼けたること」わびたるに」（榊原本『和泉式部集』）等。○もろこし船―相手からの手紙の比喩。その衝撃の大きさをゆえに外洋を航海する中国船に準えた。○ばかりに―程度ではなく、原因を表す用法。「うせいで」、「うばかりに」。参考「今来むといひしばかりに」長月の有明の月を待ち出でつるかな」（『古今集』恋四・素性）等。

【余説】

詳細は拙著A後編第一章をご参照願いたいだが、今日なお、「わびたりける」で読点を打つ文章を切る立場が支配的なのはなぜであろうか。すなわち諸賢は、「五条わたりけるの女」を高子のこととし、これをわがものにできなかつたのは「男」を措いてほかになく、さらに、「人の返りこと」は失意の「男」を慰めてくれた第三者への「男」の返信と解かれるのだけれども、これは文法的に成り立つ余地のまったくない、ありえない解釈である。あらぬ思い込みで洗脳された誤読の垂れ流しは、もういい加減やめていただきたい。素人ならば好きに読めばよいようなものだが、専門家がこれではほんとうに困る。

また、本段が「難解」なのは、もともとの文章がことば足らずだからだとか、不完全だからだとか、『伊勢物語』側に責任をなすりつける評言にもしばしば出くわすが、これも酷い話だ。足らないのはその注釈者の読解力の方であり、不完全なのはその注釈者の思考力の方であることを、この際よくよく省みるべきではなからうか。

本段は、「男」が、自分と同じ経験をした友人の手紙を見て、かつての悲恋が忽然と蘇り、もらい泣きの涙で不覚にも袖を濡らした、という話なのであり、「五条わたりける女」ということばは、「男」の人生に刻印された甘美な傷の痛みを呼び醒まさずにはおかない「符号」だったのである。

## 第二十七段

### 【本文】

昔、男、女のもとに一夜行きて、またも行かずなりにければ、女の、手洗ふ所に、貫簀ぬきすをうちやりて、たらひの影に見えけるを、みづから、

わればかりもの思ふ人はまたもあらじと思へば水の下にもありけり

とよむを、来ざりける男立ち聞きて、

水口みなぐちにわれや見ゆらむかはずさへ水の下にてもる声に鳴く

(二六〇・二行～一〇行)

### 【現代語訳】

昔、男が、(ある) 女の許に一夜行って、二度と再び行くことなく終わってしまったので、(その) 女が、手を洗う所で、(覆いの) 貫簀を払いのけて (みると)、盥の (水の) 影に (自分の姿が映って) 見えたのを、直々に、

私ほど恋の悩みを抱えた人間は、(この世に) 二人とないだろうと思っていたところ、(何とまあ、盥の) 水の下にも (もう一人) いたのだった。

と詠んだのを、来なかった男が (偶然) 立ち聞いて、(次のように詠んだ。)

(田圃の) 水口 (ならぬ盥の端っこ) に (あなたへの恋ゆえに嘆き悲しむ) 私の姿が映っているのでしょいか。

(いやそれどころか、) 蛙(ならぬ別の男、同じ苦しみを味わっているお仲間) までもが、(私と) 声を合わせて  
鳴いて(、いえ泣いて) いますね。

【注】

○またも行かずなりにければ―男が女のもとを訪れた時、他にも男を通わせている形跡があり、その点にわだかまりを覚えたからである。女自身に魅力がなかったためではない。○みづから―本文の混乱を想定してみたくなる箇所だが、今はひとまず、悲劇のヒロインを演じるに詠え向きの状況に遭遇した女が、勿体をつけて歌を詠みあげる様子を、先取りして誇張した表現とみておく。自分から進んで。直々に。○来ざりける男立ち聞きて―女に未練があつて様子をうかがいにやつて来ていたのである。○かはずさへ―「かはづ」は女に泣かされている他の男の比喩。別の男までもが。

【余説】

『伊勢物語』中「かはづ」が登場するのは本段と第百八段の二章段だが、この両章段が同工異曲ともいふべく大変よく似た構成および内容になっている点には十分注意する必要がある。詳細は拙著A後編第三章をご参照いただきたいが、このことをひとたび弁えるならば、従来正しく読み解かれて来なかった「かはづ」の寓意も、立ちどころに判明する。すなわち本段の「かはづ」とは、「男」自身の比喩でも、「女」を揶揄した表現でも、田圃の蛙そのものでも毛頭なく、「女」が通わせていた「男」とは別の男の意を寓していたわけである。

## 第四十一段

### 【本文】

昔、女はらから二人ありけり。一人はいやしき男の貧しき、一人はあてなる男もたりけり。いやしき男もたる、師走のつごもりに、上の衣を洗ひて、手づから張りけり。心ざしはいたしけれど、さるいやしきわざもならはざりければ、上の衣の肩を張り破りてけり。せむ方もなくて、ただ泣きに泣きけり。これをかのあてなる男聞きて、いと心苦しかりければ、いとよらなる緑衫の上の衣をし出でてやるとて、

紫の色濃き時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

武蔵野の心なるべし。

(三二ウ・七行〜三二ウ・二行)

### 【現代語訳】

昔、(上流の) 姉妹が二人いた。一人(≡妹)は身分の低い男で貧しい男を、(もう) 一人(≡姉)は、高貴な男を(夫に) 持っていた。身分の低い男を(夫に) 持っていた(方の) 女が、(ある年の) 十二月の下旬に、(夫の) 袍を洗って、自分の手で(張板に) 張った。(夫のために) 真心は尽くしたのだけれど、(何しろ) そのような下々のする仕事など初めてだったので、(とうとう) 袍の肩(の部分) を張り(損ねて) 破ってしまった。(夫の) 一張羅を台無しにしてしまった女は、途方に暮れて) ただもう泣くばかりだった。このことを、あの高貴な男が聞いて、たい

そう気の毒に思ったので、とても華やかな緑衫の袍を（急いで）仕立てて送るということだ、

紫草の色が濃い時は、目も遙かに（見通されて、この）野原に生えている草木は（皆）同じに見えるのでした。

―妻を深く愛している今は、私の気持ちも遍く行き届いて、縁者であるあなた方のことも等しくいとしいと思われるのでした。

（これは、あの）武蔵野の（古歌）の趣なのだろう。

【注】

○師走のつごもりに一年の瀬の寒い時期に夫の一張羅をわざわざ洗ったのは、新年の朝賀に間に合わせようとしたためである。○し出で―底本以下「みいて」。だが、「み」は「し」の誤写とみて本文を改めた。「之（し）」↓「三（み）」。  
動詞「し出づ」には、期日までに装束などを調進するの意があり、この文脈にうまく適合する。参考「かくて、年返りて、ついたちの御装束、色よりはじめていときよらに、し出で給へれば、いとよしとおほして、着てありき給ふ」（『落窪物語』 卷二）「四月になりぬ。更衣の御装束、御帳など、よしあるさまにし出づ」（『源氏物語』 明石巻）等。なお、大島本本文は「た、かたときにしいて、」となっており注目されるが、後世の改変であること論を俟たない。

【余説】

拙著A前編第七章で縷説したとおり、現行本文で「みいて」となっている箇所は「しいて」が原形だったと考えられる。「みいて」||「見出で」のまま读了場合、「あてなる男」は「いとよらなる緑衫の上の衣」を偶然見つけて

送ったことになるがおかしい。そうではなく、正月一日の朝賀に間に合わせるべく、華美な袍を急ぎ新調して届けたと、もとはそう書いてあったはずなのである。

## 第四十五段

### 【本文】

昔、男ありけり。人のむすめのかしづく、「いかでこの男にもいはむ」と思ひけり。うち出でむことかたくやありけむ、もの病みになりて、死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親聞きつけて、泣く泣く告げたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれと籠りをりけり。

暮れがたき夏の日ぐらしながむればそのこととなくものぞかなしき

時は水無月のつごもり、いと暑きころほひに、宵は遊びをりて、夜ふけて、やや涼しき風吹きけり。螢高く飛びあがる。この男、見臥せりて、

行く螢雲の上まで去ぬべくは秋風吹くと雁に告げこせ

(三四オ・九行〜三五オ・五行)

### 【現代語訳】

昔、男がいた。(しかるべき家柄の)未婚の娘で(親が)大事に養育している娘が、「何とかしてこの男とつきあいたい」と思っていた。(しかし、その思いを)口に出すことがむずかしかつたのだろうか、(悶々としているうちに、

それが原因で) 体調が悪化して、死を免れなくなった時に(ようやく)、(実はずっと) こう思っていたのです」と打ち明けたのを、(男) 親が(乳母から) 聞きつけて、(その思いを) 泣きながら(男に) 知らせたところ、(男は) とるものもとりあえずやって来たのだけれど、(時すでに遅く、娘は) 死んでしまったので、(空しく家に戻るや、そのまま忌に) 籠っていたのだった。

なかなか暮れない夏の日の日中いっぱいぼんやりと外を眺めていると、これといった理由もなく漠然とした悲しみに包まれる。

季節は六月の下旬、たいそう暑い時分に、宵(のうち) は楽器を奏でていて、夜が更けて(から)、少し涼しい風が吹いた。(折しも、庭の水辺で一匹の) 螢が高く飛び上がる。この男は、(その様子を) 横になりながら見て、

(飛んで) 行く螢よ。おまえが(そのまま) 雲の上まで飛び去ることができるならば、(地上ではもう) 秋風が吹いていると、(待っている) 雁に知らせておくれ。

【注】

○籠りをりけり―死穢に触れた男は、自邸に戻って籠居したのである。○「暮れがたき」歌―この歌、底本以下現存諸本ほとんどにおいて「行く螢」歌のあとに並列して置かれており、古来その落ち着きの悪さ、必然性のなさが問題視されて来た。それもそのはずで、元来は右本文の位置にあったのである。

## 【余説】

詳細は、拙著B第I部第3章をご参照いただきたいが、「男」が二首続けて詠歌する本段現行本文の形態は決して本来的なものではなく、書写者某の不注意が原因で右に示した本文が機械的に変化したその最終形に過ぎない。しかるに、諸賢はなおも現在の本文に執着し、旧態依然たる、摩訶不思議な、不合理な読解姿勢を崩そうとはされないのだ。この頑なさにはもはや呆れるほかない。『伊勢物語』の本文が、単なる誤写の次元を越えて、かくもダイナミックに変化する場合もありえたことを、ここで改めて強調しておきたい。

## 第四十六段

### 【本文】

昔、男、いとうるはしき友ありけり。かた時さらずあひ思ひけるを、人の国へ行きけるを、いとあはれと思ひて別れにけり。月日経ておこせたる文に、「あさましく、対面せで月日の経にけること。『忘れやし給ひにけむ』と、いたく思ひわびてなむ侍る。

世の中の人の心は目離<sup>か</sup>るれば忘れぬべきものにこそあれ」

といへりければ、よみてやる、

目離るともおもほえなくに忘らるる時しなければ面影に立つ

(三五オ六行～三五ウ・六行)

【現代語訳】

昔、男が（いて）、無二の親友がいた。（二人は）一時も離れることなくお互いをいとしく思っていたのだが、（友人が）地方へ赴任したので、（男は）たいそう悲しいと思って別れてしまった。（それから）月日が経って（友人が）よこした手紙に、「（我ながら）呆れたことに、（あなたと）対面しないで（空しく）月日が経ったことです。『あなたは今も、私のことをすっかり忘れてしまわれたらどうか』と、ひどくやりきれない思いでおります。

世間（一般）の人の心（というものは、会う機会がなくなると（その相手のことを）自然と忘れるに違いないものであります。

としたためてあつたので、詠んで送った歌、

（私には、ほかならぬあなたと）お会いする機会がなくなつたとも思われませんが。（あなたのことを）自然と忘れる時などまさかありませんので、（あなたの）お姿が（私の）眼前にずっと浮かんでおります。

【注】

○人の国へ行きけるを―地方官に任命されて赴任するのである。○月日経て―任地は遠国であるうえに、諸手続き等生活が落ち着くまでに日数を要したのである。○「世の中の」歌―この箇所は、底本「世中の人の心はめかるれはわすれぬへき物にこそあめれ」に作り、諸本も事情は同じなので、従来手紙文の結びと解されて来た。けれどもここは、「男」の「忘らるる」歌と対をなす友人の和歌とみなければならぬ。ゆえに今、下句相当部分につき、「わすれ」は「わすられ」からの、「あめれ」は「あれ」からの転化本文と判断して、これを復元した。「忘られ」の「れ」は自発の

用法。「世の中の人の心」というフレーズはそもそもトーンが高く、和歌に多用される表現である。参考「世の中の人の心は花染めのうつろひやすき色にぞありける」(『古今集』恋五・よみ人しらず)「色見えてうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」(同・小野小町)「初雁の鳴きこそわたれ世の中の人の心の秋しうければ」(同・紀貫之)等々。

### 【余説】

「うるはしき友」の手紙の末尾部分がもと和歌であったことについては、早く賀茂真淵の『伊勢物語古意』がその旨を述べ、下つて、迫徹朗「歌のゆくえ―『伊勢物語』四十六段をめぐって―」(『尚絅大学研究紀要』第十七号、平六・二)が多角的に検証したところだが、今日なお「市民権」を得るに至っていない。これまた嘆かわしい事態といわざるをえない。「男」の「忘らるる」歌は親友が詠んだよこした贈歌に対する返歌にほかならず、問題の「贈歌」は、便りの終わりを「五・七・五・七・七」にうまく整形、いな、復元してやりさえすれば、立ちどころによみがえるのであって、本段の本文は、今後右に提示した形で読まれるべきなのである。

## 第五十段

### 【本文】

昔、男ありけり。うらむる人をうらみて、

鳥の子を十づつ十は重ぬとも思はぬ人を思ふものかは

といへりければ、

行く水に教書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

また、男、

吹く風に去年の桜は散らずともあな頼みがた人の心は

また、女、返し、

朝露は消え残りてもありぬべしたれかこの世を頼みはつべき

また、男、

行く水と過ぐる齡よほと散る花といづれ待ててふことを聞くらむ

しのび歩きかたみにしける男女の、あだくらべしけることなるべし。

(三六ウ・六行〜三七ウ・一行)

【現代語訳】

昔、男がいた。恨み言をいう(女の)人を(、そっちこそと逆に)恨んで、

(たとえ)鳥の卵を十個ずつ十段重ね(え)たとしても、愛してくれない人を愛する道理がどこにありましよう

か。(。あろうはずありません)。

といったところ、(女はこう返した)。

(流れ)行く(川の)水に数を書くよりもはかないとなみは、愛してくれない人を愛することだと思ひ知りま  
した。

(そこで、) もう一度、男が、

(たとえ) 吹く風に去年の桜(の花)は散らないとしても、ああ(まったく)あてにしがたいことです。人間の心(、)そしてあなたの心)は。

(すると、) また、女が、(応じて) 返歌、

朝露は(夕方まで)消え残ることもきつとあるでしょう。(それに引き換え、) いったい誰がこの(はかない)人間の生を(、)そしてあなたとの仲を)最後まであてにすることができましようか(。とてもできません)。

(以上を受けて、) また、男が(詠んだ歌)、

(流れ) 行く(川の)水と、過ぎ(去)る(人間の)年齢と、(吹く風に)散る(桜の)花と、(この三者のうち、) いったい(ど)れが、「待ってくれ」ということばを聞き入れているだろうか(。どれもみな、聞いてくれはしないのだ)。

(これは、別の異性ととの)密会をお互いにし(てい)た男女が、どちらがよりあてにならないかを競った歌(のやりとり)なのだろう。

### 【注】

○「行く水に」歌―この歌、底本以下現存諸本においては「吹く風に」歌の返歌として四番目に配置されているが、錯誤とみて二番目に移した。男の一首目下句の表現「思はぬ人を思ふものかは」を受け、これを利用して「思はぬ人を思ふなりけり」と返したわけである。○「朝露に」歌―この歌、底本以下現存諸本においては「鳥の子を」歌の返歌

として二番目に配置されているが、錯誤とみて四番目に移した。男の二首目下句「あな頼みがた人の心は」を受けて「たれかこの世を頼みはつべき」と返したわけである。○「行く水と」歌―参考「散る花の待ててふことを聞かませば春降る雪と降らせざらまし」（寛平御時后宮歌合）。○しのび歩きかたみにしける―こつそりと別の異性のところへ出かける行為をそれぞれにしていた。「かたみに」は、男は男で女は女で各個にの意。なお、身分がそれほど高くなければ、当時女が男に会いに行くこともあった。○あだくらべしけること―はかないもの、あてにならないもの比べをした歌の贈答。「こと」は「言」で歌の意。この場合は所載の五首を指す。

【余説】

現存諸本において本段四首目までの歌順に混乱が生じていることは、早くに上田秋成の『よしやあしや』が指摘するところであり、そのとおりと思われるので今これを正した。ところが、本段本文が孕み持つ「混乱」はそれだけではなく、段末の一文にもまた認められたのである。すなわち、もとは右本文のごとくであったものが、いつしか「しのび歩き」と「あだくらべ」とが入れ替わってしまい、現在に至る奇形本文が誕生したものと考えられるのである。にもかかわらず諸賢は、相変わらずありのままの読解に甘んじておられるようだが、なぜそれが許されるのか、まったく理解に苦しむ。触らぬ神に祟りなしということなのであろうか、今後も、変わり果てて意味をなさなくなった現行本文が無難に読み継がれていくとすれば、それはゆゆしい事態だといべきだろう。なお、詳細については、拙著A前編第九章をご参照いただきたい。

## 第五十五段

### 【本文】

昔、男、思ひかけたる女の、え得まじうなりてのちに、

思はずはありもすらめどことの葉のをりふしごとに頼まるるかな

(三八オ・八行―一一行)

### 【現代語訳】

昔、男が、思いを寄せていた女が、わがものにできそうになくなったあとで、

(あなたは私のことを、もう) 愛してなどいらないでしょうが、(私の方は、かつてのあなたの) ことばが何かにつけてあてにされることです。

### 【注】

○なりてのちに―底本本文「なりての世に」。定家本系を中心とする諸本のほとんどがこれに同じだが、「世」||「よ(与)」は、「ち(知)」の誤写とみななければならない。参考「弥生のついたちより、しのびに人にものらいひてのちに、雨のそほ降りけるに、よみてつかはしける」(『古今集』恋三・在原業平/『伊勢物語』第二段)「女友たちと物語して、別れてのちに、つかはしける」(同雑下・陸奥)「女をうらみて、「さらにまうで来じ」とちかひてのちに、つかはしけ

る」(『拾遺集』 恋四・藤原実方)、「あひしりて侍りける人の、まうで来すなりてのち、心にもあらず声をのみ聞くばかりにて、また音もせず侍りければ、つかはしける」(『後撰集』 恋三・よみ人しらず)「かくて住まずなりてのち、中将のもとより、衣をなむしにおこせたりける」(『大和物語』 第六十段) 等々。なお、現存伝本中、広本系の大島本および一誠堂旧蔵伝為相本が「なりてのちに」、古本系第三類の宮内庁書陵部蔵伝肖柏筆本が「なりてのち」の本文を有している。

【余説】

本段本文中焦点となる「なりてのちに」の箇所は、従来現存形「なりての世に」のまま読まれているが、「世」の解釈が落ち着かず無理が生じている。すなわち、「世」||「よ(与)」は「ち(知)」の誤写と認めないかぎり、問題は永遠に解決しないのである。詳しくは拙著A前編第五章を参照されたい。

第五十八段

【本文】

昔、心つきて色好みなる男、長岡といふ所に家づくりてをりけり。そこのとたりけりける宮ばらに、こともなき女どもの、田舎なりければ、「田刈らむ」とて、この男のあるを見て、「いみじの好き者のしわざや」とて、集まりて入り来ければ、この男、逃げて奥にかくれにければ、女、

あれにけりあはれいく世の宿なれや住みけむ人のおとづれもせず

といひて、この屋見に集まり来ゐてありければ、この男、

葎生ひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり

とてなむ出だしたりける。この女ども、「穂拾はむ」といひければ、

うちわびて落穂拾ふと聞かませばわれも田面に行かましものを

(三八ウ・九行〜三九ウ・六行)

### 【現代語訳】

昔、思慮分別があつて風流を好む男が、長岡という所に家を造作して滞在していた。(ある日) その近隣にあつた宮様方(のお住まい)に(仕える)、これといつて難のない女たちが、田舎だつたので、「稲を刈ろう」ということで(出かけたところ)、(偶然) この男がいるのを目撃して、「たいそうな風流人のお建てになつた御殿ですこと」といふて、集まつて(敷地内に)入つて来るので、この男は、(一目散に)逃げて建物の奥(の方)に隠れてしまつたので、(ある)女が、

(すつかり) 荒れ果ててしまつたことです。ああ、(いったい、建てられてから) どれほどの(時が経つた)宿なのでしようか。(かつてここに)住んでいたであらう人が(もう)姿を見せることもありません。—あなたは私たちから逃れ果てたまま、一向に顔を出そうとはなさらないのですね。

といふて、この家屋を(間近で)見物するために(皆で)集つて来て(、おしゃべりをしながら庭に)居座つていたので、この男は、

雑草が生い茂って荒廃した宿のいまましいところは、たとえ一時であっても、(このように)鬼が集まって(がやがやと)騒ぎ立てることだったのですね。―あなた方の無遠慮な来訪にはほとほと閉口しております。

と詠んで差し出したのだった。(すると、)この女たちが、「(一緒に)落穂を拾いましょう」といったので、(あなた方が、生活に)困窮して落穂拾いをするのだと予め聞いておりましたなら、私も(お手伝いに)田圃のほとりまで行きましようものを。―あいにくそうではないので、この度はお断りします。

【注】

○田刈らむ―主語は「女ども」。女たちが稲刈りをしようとして外出したのである。○いみじの好き者のしわざや―「男」の家の造作を女たちが冷かしたことば。○この屋見に―底本「この宮に」。通行の本文はこの形だが、「このやみに」↓「このみやに」↓「この宮に」の誤写とみて改訂した。「こともなき女ども」の闖入理由が、男が建てた瀟洒な建物を見るためであったことが明確化する。ちなみに、広本系諸本および塗籠本はこの部分を欠いている。不審本文であるため削除したのであろう。

【余説】

本段は従来、「田刈らむ」の主語、「いみじの好き者のしわざや」の解釈などの問題が複合して、十全に読み解けない状態が続いていたが、右に提示したことく不審本文「この宮に」を「この屋見に」に改訂することにより、一転すっきりとした読解が可能になるのである。にもかかわらず、諸賢なお現存本文を疑わず、母親が内親王でありその別邸

の敷地内に「男」の「家」があったために、それをも「宮」と称したのだと説明しているようだが、強弁もはなはだしい。詳しくは、拙著A前編第二章を「参照いただきたい」。

## 第六十七段

### 【本文】

昔、男、逍遙<sup>せうよう</sup>しに、思ふどちかいつらねて、和泉の国へ如月ばかりに行きけり。河内の国生駒の山を見れば、曇りみ晴れみ、立ちゐる雲やます。朝より曇りて、昼晴れたり。雪いと白う木の末に降りたり。それを見て、かの行く人の中に、ただ一人よみける、

昨日今日雲の立ち舞ひかくろふは花の林を惜しとなりけり。

(四八オ・一行く四八ウ・一行)

### 【現代語訳】

昔、男が、(息抜きの)行楽をしに、気の合う者同士連れ立って、和泉の国へ二月頃に行ったのだった。(その道中で)河内の国の生駒の山を見ると、曇ったり晴れたり、(山に)湧き出て漂う雲(の動きが)が(一向に)収まらない。(次の日は)朝方から曇って、昼になって晴れた。(すると、生駒山の頂には、まだ)雪がたいそう白く木々の梢に降っていたのだった。その(美しい)光景を見て、先の一行の中で、ただ一人(男)だけが詠んだ(歌)、  
昨日今日と雲が(せわしなく)浮動せずと(生駒の山が)隠れていたのは、(山頂の雪が)花の(ように見

える) 林(が、日に照らされて消えてしまうの)を惜しいと思つてのことだったのだ。

【注】

○「昨日今日」歌―第五句の本文は底本以下ほとんどの伝本で「うしとなりけり」なのだが、それでは、美しい「花の林」のいつたどこが「憂し」と感じられたのか不可解というほかなくなる。第三句と第四句の間に「人に見せるのが」「人に見られるのが」等の意を補つて解くのが通説だが、これは論外。ゆえに、踊り字「ゝ」または「を(乎)」が「う(宇)」に誤写されたものとみて本文を改めた。この一首は、せっかくの「花の林」が仲春の陽光に直射され消えてしまうのを、雲が「惜し」と思つて隠しつづけた、という見立ての歌なのである。

【余説】

本段の「男」の歌は、結句が現行本文のままでは解釈不能というほかなく、「うし」を「をし」に改めることではじめて歌意が通じようになる。そのうえで、雲が何を「惜し」と思ったかをめぐつては、右に示した解釈案のほかにも別解の成立する余地があるだろう。詳細については、拙著A前編第一章をご参照いただきたい。

## 第七十七段

### 【本文】

昔、田邑たむらの帝と申す帝おはしましけり。その時の女御、多可たか幾子きこと申す、みまそかりけり。それ失せ給ひて、安祥寺にて御わざしけり。人々捧げ物奉りけり。奉り集めたるもの、千捧げばかりあり。そこばくの捧げ物を木の枝につけて、堂の前に立てたれば、山ことさらに堂の前に動き出でたるやうになむ見えける。それを、右大将にいまそかりける藤原の常行と申すいまそかりて、講の終わるほどに、歌よむ人々を召し集めて、今日の御わざを題にて、春の心ばへある歌奉らせ給ふ。右の馬の頭なりける翁、目はたがひながらよみける、

山のみなうつりて今日にあふことは春の別れをとふとなるべし

とよみたりけるを、今見れば、よくもあらざりけり。そのかみは、これやまさりけむ、あはれがりけり。

(五四オ・九行〜五五ウ・二行)

### 【現代語訳】

昔、田邑の帝と申し上げる帝がおいでになった。その時の女御で、多可幾子と申し上げる方がいらっしゃった。その方がお亡くなりになって、安祥寺で法要を行った。(参列した)人々が捧げ物をお供えした。集まった捧げ物(の数)は、(何と)千捧げほどもあった。たくさん捧げ物を木の枝に(括り)つけて、お堂の前に立てたので、(そ

の様は、まるで本物の「山がわざわざお堂の前に動き出た（かの）」ように見えたのだった。それを、右大将でいらつしやうした藤原の常行と申し上げる方がおいでになって、（経典の）講義が終わる時分に、（参列者の中で）歌に堪能な人々を招集なさつて、今日のご法要を題にして、（なおかつ）春の趣がある歌を差し上げさせなさる。お堂の前の捧げ物の「山」を、右の馬の頭であつた老人が、（本物の山と）見間違え（、さらに、周囲の山々とも遠近の区別がつかなくなつ）たままで詠んだ歌、

山が皆（お堂の前に）移動して（来て、）今日（の法要）に出会うのは、（亡き女御様との）春の（時節のお）別れを弔うということなのだろう。

と詠んだのを、今見ると、（たいして）よくもないのだった。（しかし、）当時はこの歌が（、他の歌よりも）優つていたのだろうか、（その場にいた皆が、しきりに）感動したのだった。

【注】

○山ことさらに―山がわざわざ。山が特別に。底本以下ほとんどの諸本で「山も、さらに」に作るが、「も（毛）」は「こと（己止）」の誤りとみて本文を改めた。○それを―捧げ物の「山」を指し示すこのことは、意味上、あとの「右の馬の頭なりける翁、目はたがひながらよみける」に係る。その間に「右大将にいまそかりける藤原の常行」から「春の心ばへある歌奉らせ給ふ」までが挿入された格好になっているため、便宜上位置をずらして訳した。○目はたがひながら―捧げ物の「山」を本物と見間違えたのみならず、周囲の山々との遠近感も失くしたままでの意に解いた。○今見れば―「右の馬の頭なりける翁」が過去を回想してこの話を語っているという設定。

【余説】

詳細は、拙著A前編第三章をご参照いただきたいが、「山ことさらに」の箇所、現本文「山もさらに」に従ったのは、係助詞「も」と副詞「さらに」の意味が二つながら説明不能となるはずである。しかるに、諸賢なお従前どおりの姿勢を崩しておられないのは、必ずや確固たる理由、確信があるのだろう。ならば是非、それをお聞かせ願いたいものである。

第七十九段

【本文】

昔、氏の中に親王みこ生まれ給へりけり。御産屋に、人々歌よみけり。御祖父方おほぢなりける翁のよめる、

わが門に千尋ある竹を植ゑつれば夏冬たれか隠れざるべき

これは、貞数さだかずの親王。時の人、中将の子となむいひける。兄の中納言行平の娘の腹なり。

(五七ウ・七行〜五八オ・五行)

【現代語訳】

昔、在原氏の中に親王がお誕生になった。(その)産養い(の祝宴の折)に、(一族の)人々が(お祝いの)歌を詠んだ。(そのうち、親王の)お爺様方(の縁者)だった老人が詠んだ(歌)、

わが家の入口に千尋もの（蔭ができる）竹を植えたので、（暑い）夏でも（寒い）冬でも、いったい誰が（その大きな蔭の下に）隠れ（て凌げ）ないことがありますようか。―わが一門もこれで安泰というものです。

【注】

○千尋ある竹を植ゑつれば「竹」とした部分、底本以下定家本系諸本では「かけ」に作る。けれども、「蔭を植う」は不自然な表現というほかない。真名本等の「竹」を原形とみたゆえんである。「た（多）」「か（可）」の誤写が想定されよう。

【余説】

通行の定家本系本文に従うと、本段の「翁」の歌は「千尋ある蔭を植ゑた」と詠んだことになる。しかし、拙著Aの「はじめに」でも触れたとおり、当時の和歌において、「蔭を植う」という突飛な表現がなされたとは考えにくい。「植ゑ」たのはあくまで「千尋ある竹」であって、「蔭」そのものではないのである。が、それでも「蔭」の本文にこだわるならば、今後はこの奇抜な語法が成り立つ可能性について、証拠に基づいた十分な説明がなされねばなるまい。

## 第九十四段

### 【本文】

昔、男ありけり。いかがありけむ、その男住ますなりにけり。のちに男ありけれど、子ある仲なりければ、細かにごそあらねど、時々ものいひおこせけり。女方に、絵描<sup>か</sup>く人なりければ、描きにやれりけるを、今の男のものすとて、一日二日おこせざりけり。かの男、「いとつらく、おのが聞ゆることをば、今まで給はねば、ことわりと思へど、なほ人をばうらみつべきものになむありける」とて、ろうじてよみてやれりける、時は秋になむありける。

秋の夜は春日<sup>はるひ</sup>忘るるものなれや霞に霧や千重まざるらむ  
となむよめりける。女、返し、

千々の秋一つの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ

(七九オ・六行〜七九ウ・一行)

### 【現代語訳】

昔、男がいた。どんな事情があつたのだろうか、その男が（女との）夫婦関係を解消してしまった。（女には）その後（別の）男がいたけれど、（何せ）子供のある間柄だったので、親密でこそないものの、（女はもとの男に）時々手紙をよこしたのだった。（ある時、男が）女の所に、（この女は）絵を（上手に）描く人だったので、描くよう頼んだところ、（あいにく）現在の男が来ているということで、一兩日（絵を描いて）よこさなかった。（そこで）あ

の（もとの）男は、「たいそうつらいことに、私が（お願い）申し上げたことを、（今の）今までしていただけないので、当然とは思いますが、（私の心境は穏やかではなく、）やはりあなたにうらみごとをいわずにはおられないものなのでした」と書いて、からかって（次のような歌を）詠んでやった、その時節は（あたかも）秋なのであった。秋の夜には、春の日を忘れるものなのです。霞よりも霧（の方が）が千倍も勝っているでしょう。——今の主人を前にして、私のことなどすっかりお忘れというわけですね。

と詠んだのだった。（すると、）女が、返し（た歌）、

千の秋が（束になっても、たった）一つの春に敵いましょうか、敵うはずがありません。なぜって、（秋は）紅葉も花もいっぺんに散ってしまう（凋落の季節な）のですから。——今の夫千人がかりでも、あなた一人にはとうてい勝てっこありません。

【注】

○紅葉も花もともにこそ散れ——ともに」は、いっぺんに、同時にの意。参考「君恋ふる涙は秋にかよへばや袖も袂もともに時雨るる」（陽明文庫本『貫之集』）「色も香もともにほへる梅の花散るうたがひのあるやなになり」（宮内庁書陵部蔵歌仙歌集本『兼輔集』）等。よって、「花」を春の桜のこととし、この語をどちらも、双方の意に解する通説は誤り。この下句は、秋は紅葉と花が一斉に散ってしまう凋落の季節であることを述べたもので、「春」に喩えられたもとの「男」と比較すると、今の夫の魅力が一気に色褪せてしまうことを寓しているのだ。

### 【余説】

本段の問題は、女の返歌の解釈にある。従来、そして今日なお、その下句は、秋の紅葉も春の花もどちらも散るの意に読み解かれているが、これが大きな、そして初歩的な間違いなのだ。そもそも、男なんてみんな浮気者、土台あてになんかならないわ、などという冷めた歌を、「女」がここで詠む道理がどこにあったというのだろうか。あなたは今の男に夢中で私のことなどすっかりお忘れなのだろう、とからかってきた「男」の歌に対する「返し」なのだから、当然、いいえあなたの方が今の男より千倍すてきよ、と応じるはずだろう。また、上句ⅡA、下句ⅡBの論理関係も、「AけれどもB」でも、「BけれどもA」でもなく、「AなぜならばB」と捉えるのが正解だったのである。以上の詳細については、拙著A後編第六章をご参照願いたい。

## 第百八段

### 【本文】

昔、女、人の心をうらみて、

風吹けばとはに波越す岩なれやわが衣手の乾く時なき

と常のごとぐさにいひけるを、聞き負ひける男、

宵ごとにかはづのあまた鳴く田には水こそまされ雨は降らねど

(七九オ・六行〜七九ウ・一行)

【現代語訳】

昔、女が、(恋) 人の (薄情な) 心を恨んで、

風が吹くと決まって波が越える (海辺の) 岩なのでしょいか、私の衣の袖は (あの人のつれなさゆえにいつも涙に濡れて、) 乾く時がありません。

といつもの口癖でいったのを、聞いて自分のことだと思った男が、

宵ごとに蛙がたくさん鳴く田圃では、(彼らの流す涙で) おのずと水嵩が増さるのですね、雨は降りませんのに。— あなたのつれなさゆえに、毎晩大勢の男たちが泣かされているのですよ。

【注】

○かはづのあまた— 蛙がたくさん。「あまた」は数が多いこと。参考「時鳥汝が鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから」(『伊勢物語』第四十三段)「名のみ立つ死出の田長は今朝ぞ鳴く庵あまたとうとまれぬれば」(同)「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」(同第四十七段)「玉葛はふ木あまたになりぬれば絶えぬ心のうれしげもなし」(同第一百十八段) 等々。また、「かはづ」は「女」の薄情に泣かされている男の比喩。

【余説】

第二十七段同様、『伊勢物語』中の「かはづ」は、「女」の薄情けに泣かされている男たちの比喩として機能している。本段の場合、「あまた」の一語によってそのことがよりはっきりするはずなのだが、この唯一無二の正解が巷で通

説化するの、いったいいつになるのだろうか。もどかしさは募るばかりだ。詳しくは、拙著A後編第三章をご覧ください。  
ただきたい。

